

CAGLIERO

カリエロ11 サレジオ会
宣教ニュース

N.110 - 2018年2月



サレジオ会宣教部門によるサレジオ会共同体・サレジオ・ミッションの友人のための通信

先

月、12月の総長の宣教への呼びかけは、私たちサレジオ会員の耳と心を強く打つ“ささやき”でした。聖霊が惜まない応答を呼び覚ますことを祈っています!

また、もう一つ、教皇フランシスコが全世界に行った思いがけない発表に、皆さんの関心を向かわせるように少しづつしていきたいと思えます: 2019年10月の特別宣教月間の開催です。

今年2018年は、若者のためのシノドスという全教会の歩む道へと方向づけられ、この道に光が当てられています。しかも今から、1919年に書かれた教

皇ベネディクト十五世の使徒的書簡『マクシムム・イルドMaximum Illud』を手取るよう招きます。来年はその100周年に当たります。このことが、教皇フランシスコの発表した宣教月間の動機となっています。この招きを私たちは真剣に受けとめなければなりません。この貴重な書簡を注意深く研究することができるでしょう。

この使徒的書簡の題はとても印象的です: Maximum Illud、すなわち“とても大きなこと”。つまり、良い知らせをすべての人に^{こま}告げ知らせることは「偉大な、高邁な使命」だということです。新しいサレジオの宣教の十字架の表側には、ふさわしい言葉がはっきりと刻まれています: 「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい!」

J. Basanés

宣教顧問

ギジェルモ・バサニェス神父

若い難民は私たちに挑戦を投げかける

第

51回世界平和の日のテーマは: **移住者と難民、それは平和を探し求める人々**。世界各地のサレジオ会員は、大きな熱意をもってこの司牧課題を取り上げました。メキシコ、コロンビア、インド、イタリア、スペイン、ドイツ、オーストリア、エチオピア、ケニア、そのほか各地に目を向けてください。最近、南スーダンからの難民のために、ウガンダのパラベクに新しいサレジオ会共同体が設立されました。アジア、アフリカ、アメリカ大陸からの宣教師がそこへ赴いています。

教皇は平和メッセージで、4つの動詞を強調しています: 「受け入れる、守る、促進する、共生する」です。(以下、中央協議会訳)

「**受け入れる**」ためには、正規に入学する可能性の幅を広げること、迫害や暴力が待ち受けている場所に避難民や移住者を追い返さないこと、さらには国家の安全を懸念することと人間の基本的な権利を守ることのバランスを取ることが必要です。聖書はわたしたちに伝えています。「旅人をもてなすことを忘れてはいけません。そうすることで、ある人たちは、気づかずに天使たちをもてなしました」(ヘブライ13・2)

「**守る**」ことは、現実の危険から逃れ、避難場所と安全を求める人々の不可侵の尊厳を認識して守り、彼らに対する搾取を防ぐという責務と結びついています。わたしは、奴隷制と言えるほどの危険や虐待にさらされている女性や子どものことをとりわけ考えます。神は差別しません。「主は寄留の民を守り、みなしごとやもめを励まされる」(詩編146・9)

「**促進する**」ことは、移住者と難民の全人的発展を支えることを意味します。そのために役立つ多くの手段の中で、わたしは子どもと若者がすべての段階の教育を受けられるよう保証することの重要性を強調したいと思います。それにより彼らは自らの可能性を育み、発揮することができるようになると同時に、閉鎖的、対立的にならずに、対話の精神を育みながら、より多くの人々と出会えるようになるからです。神は「孤児と寡婦の権利を守り、寄留者を愛して食物と衣服を与えられる。あなたたちは寄留者を愛しなさい。あなたたちもエジプトの国で寄留者であった」(申命記10・18-19)と聖書は教えています。

最後に「**共生する**」とは、地域社会の全人的発展を促すために人々が互いを豊かにし合い、実り豊かな協力関係を育むプロセスの中で、難民と移住者が受け入れ社会の生活に完全に溶け込むことを意味します。このことは、聖パウロの次のことばに表れています。「あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族である」(エフェソ2・19)



宣教師の道・神のみ旨そして祝福



の数か月、ベルギー北・オランダ管区にいる私にとって大いに役立った三つのことを皆さんと分かち合いたいと思います：神の恵み・信仰のまなざし・祈りです。

神の恵みとみ旨：神に不可能なことはありません。私にとって聖書のヨナのお話は、自分自身の人生をふり返らせます。神は罪人の悔い改めを“促す”ためにヨナをニネベに遣わします。しかしヨナは、初めから自分の召し出し、使命から逃げようとします。神に協力するのを拒むのです。ヨナが自分の計画を思いどおりに立てさせてもらえなかったのは、興味深いことです。最終的に神は、人に協

力させることがおできになります。神は人の視野を“広げ”られます。自分の宣教師の道は神の恵み、み旨であると私は思っています。日々、挑戦があります：言葉の壁、カルチャーショック、寒い気候、生活様式、信仰の生き方の違いなどです。生活の中のこういった困難は、宣教師としての生き方に影響を与えます。自分のやり方で、心の赴くままに物事を行いたいと思うこともありました。しかし、これまでに学んだことによって私は謙虚になり、感謝するようになりました。私は今、主が導いてくださるところならどこでもついて行きます。主は、ヨナのためにそうされたように、すべてを一緒に行ってくださいます。

信仰のまなざし：世俗化した世の中に生きる人間にとり、科学が提供する説明や証拠を超えた事柄を受け入れるのは難しいことです。科学の教えにこれほど強い影響を受けた世界で、私たちはどうしたら神を見いだせるのでしょうか？ 私は科学と信仰という二元論は信じません。神は私たちの人生・生活に介入されると私は信じています。ふり返ると、神が計らい、守ってくださった体験が思い起こされます。困難の時、神は私をひとりになさいませんでした。約束されたように、どのような状況にあってもいつも共にいてくださいました。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイ28・20)。

祈り：困難な状況に直面するとき、私にはこの世をコントロールする力はありません。自分を深く理解してくれる誰かが私には必要です。神こそ、その「誰か」です。自分が感じ体験しているすべてを、神のみ前に持って行きます。日々の祈りを通してそれを言い表します。まだ修練生のころ、宣教師になることを夢見はじめた時から私はこの信頼関係を築いてきました。神に感謝、今に至るまで、個人の祈り、共同体の祈りを通して主とのこの絆を保っています：日々の口ザリオかなめを通して、朝起きたとき、また夜休む前に主に感謝をささげるときなど。祈りは、私の生活の最も強い要です。日々、忠実に、信心をこめて実践しています。主は叫びを聞いてくださると、体験が教えてくれます。

これが、私を強めてくれる三つのものです。私を宣教師として幸せに、前向きにしてくれます：私たちの管区、ベルギー北・オランダ管区の4人の兄弟会員と共にここアムステルダムで、自分の与えられた場には私は満足しています。私たちは、ベルギー、インドネシア、インド、チモール出身者から成る国際的な共同体です。私たちの共同体は、支部の周り7キロ四方に広がる地域の4つの小教区、5つの教会での奉仕をゆだねられています。私たちは若者のための新しい司牧活動を始めたところです。ある種のレクツィオ・ディヴィナ、そしてテゼのスタイルでの祈りの会をしています。我らの母マリアの取りなしによって、新しい年にすべてがより良くなり、神の国のためにより多くの実を結ぶことを私たちは期待しています。

チモール出身、ベルギー北・オランダ管区アムステルダムの宣教師 シリロ・デ・デウス



サレジオの宣教の聖性のあかし

サレジオ会列聖申請人 ビエルルイジ・カメローニ神父



福者エウセビア・パロミーノ(1899 - 1935)、扶助者聖母会会員。謙遜と単純さをまとったエウセビアは、靈的教師、導き手となりました。管区長がヴァルヴェルデ・デル・カミーノからの召命の多さに驚いた際、喘息持ちで、少女たちにすばらしい話を聞かせる料理係のシスターのことを聞かされます。その後、この謙遜な修道女に会いに来る司祭たちも現れます。神学の学位のないこの修道女は、神の知恵にあふれる心を持っています。神学生、修道女、司祭、少女たちは、自分の将来について相談するためシスター・エウセビアのもとへ行きました。シスター・エウセビアは、洗濯物を干したり、野菜畑で働いたり、台所でじゃがいもをむいたりする合間に、皆を助けました。穏やかに、忍耐をもって助言し、将来を予見し、真の召命を勇気づけ、そうではないものは思いとどまらせました。



サレジオ会の宣教の意向

アメリカ大陸のサレジオ会員のために

若者、信徒の教育者として、福音の光のもと、誠実さ、正義、連帯、奉仕などの価値を若者と信徒のうちに育成できますように。

アメリカ大陸には、激しい社会的対立や腐敗の弊害に苦しむ国々があります。愛の社会的次元、透明性、公正さの教育を若者と信徒のために行うよう、私たちは呼ばれています。サレジオ家族の教育的働きが正義と連帯の実を市民社会にもたらすよう祈りましょう。

